夏休み特集：私たちの「未来」が来るまで

取材・文・写真
ゴウヒデキ

私たち会員が選者へ月詠を送る期限は毎月十五日。送った歌が載る「未来」が来るのは、翌々月のまた次の月の初め頃。自分の歌が手元を離れてから、およそ二か月半が経って、選者の選を受けた自分の作品を「未来」の誌上で目にする。

Twitterやインターネットで自作を発表すれば、即時に反応がもらえる時代に、二か月半。入会当初に感じた印象は「長い」だった。

一体、その二か月半の間に、どんな人がどんなことをしているのか？　それを知るために、東京都中野区東中野にある「未来」発行所を訪ねた

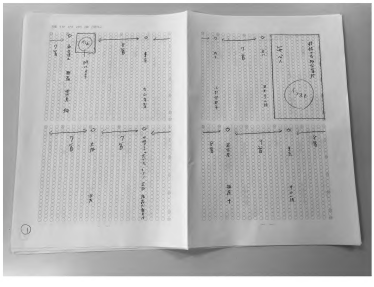
訪れたのは二月十二日土曜日。割付は、毎月第二日曜に行われているが、現在は感染症対策のため大勢で集まることができない。土曜日に原稿が揃っているか等の確認と、一部の割付を行っている。この日は本多真弓さん、紺野ちあきさん、田中翠香さんが割付準備にいらっしゃった。

郵便物が多く届く未来発行所では郵便受けもかなりの大きさ。
私たちの歌稿も、１度はこのポストの中で時を過ごしている。

割付

選者や各記事の担当者から送られて来た歌稿・原稿は発行所で「割付」を行う。割付とは誌面のレイアウトのことで、専用のレイアウト用紙が使われている。

各欄のレイアウトは、選者が担当。発行所では、選者から送られて来たレイアウト用紙と歌稿を突き合わせて、まず間違いがないかの確認が行われる。タイトル・名前の分で二行、歌は一行で計算。選者が採った歌数とレイアウト用紙上の数が合っているか一人分ずつ確かめて行く。



選者（笹公人さん）から送られてきた選歌欄のレイアウト用紙。
割付の日までに、全国から歌稿とコラム等の記事が送られて来る。

本多さんに伺うと「一から十まで数えられれば、すぐにできますよ」とのことだが、実際にやってみると「ただ数を数える」というのがなかなか難しい。集中していないと「あれ？　どこまで数えたっけ？」と確認し直すことになる。それでも割付の作業には楽しみもあり、本多さんは「『短歌パ

ラダイス』に載っていた大滝和子さんや紀野恵さんの生原稿を見たとき『本当にいるんだ！』と思った」そう。

割付の合間に行われる会話も、情報交換の場として貴重だという。

「あの歌集、読んだ？　よかったよ」

「批評会に行ったら、こんな話が……」

など、短歌の世界の「今」に触れる会話が交わされることも多いとのこと。

さらに、世代を越えた情報の伝達もあるそうで、現在の割付メンバーでも若い方の馬場紘花さんに本多さんは『短歌パラダイス』を勧めたそうだ。また「昔はルビを印刷するのに別料金がかかったから、近藤芳美さんが禁止していた」といった「未来」の来歴にまつわる話も口づてに伝わって行く。歴史が紡がれて行く場でもある。

翌十三日日曜日。各欄の割付と「未来」全体のページの割り当てを行う。参加メンバーは、千坂麻緒さん、堀隆博さん、鈴木美紀子さん、岡崎裕美子さん、馬場紘花さん。

各選歌欄、「未来広場」、書評、コラムなど分担して割付を行って行く。ここで問題となるのが、偶数と奇数。レイアウト用紙は見開き二ページ、つまり偶数なので、これが右のページで終わると、次の記事は左のページから始まることになる。すると、例えばこんな事態が起きる。

右ページの下段の左端に名前が来る場合、見開きで次のページの右上から歌が始まるので問題はないが、これが一ページずれると、左ページの下段左端に名前が来て、歌はページをめくった右上から始まることになる。作者名と歌が分断されるのは都合が悪い。

奇数ページで選歌欄が終わった場合は、空いた左ページに「書評」や「今月の一人」「伏流水」「chatter box」「時評」などの連載記事を一ページ分挿入して、できるだけ偶数ページで終わるように工夫する。下段が余る時には「その日その日」、もう少し狭いスペースの時には「私の好きな古典の一首」といったコラムを入れて調整する。

どうしてもページに数行分の空白ができそうな時は、「カット」と呼ばれるイラストを入れて、できるだけ隙間を作らない。

隙間ができないように上手く記事を配置しながら一冊にまとめて行くには相当な腕を要しそうだが、最終的なまとめを担当している千坂さんは「そんなに難しくないですよ。選歌欄を並べる順番は決まっているし、空いたところには歌集の広告とかを入れるので」と淡々と語る。

ここで、割付の皆さんからお話を聞いて知り得た情報を共有すると……

・歌集の広告や書評は、発行の早い順番に前の方から載せている

・「未来広場」の掲載順は、各選歌欄が平等になるように順繰りになっている

・表紙の絵にはタイトルがあって二〇二二年四月号の表紙絵は「山笑う」

ぜひ、お手元の「未来」を見て確認して欲しい。

全体の割付が終わると、目次とページ数の確認。千坂さんと馬場さんで「〇〇欄、何ページ」「はい、合っています」と読み合わせを行いつつ、岡崎さんが別で作成していた目次と実際のページ数が合っているかを確かめる。

割付が終わった「未来」1冊分の原稿とレイアウト用紙。
「ニューアトランティス」や各選歌欄を区分けしてゴムで綴じる。

これで割付は終了。口々に「割付が終わると明るい気持ちで帰れる」「ページが隙間なく埋まると、達成感があって気持ちいい」と晴れやかに語ってくれた。

一冊分の割付が完成すると印刷所に連絡（ＦＡＸで）。「未来」の印刷を受け持ってくれている「博英プリンティング」さんが原稿とレイアウト用紙をピックアップしてくれて、十三日後には「ゲラ」と呼ばれる校正刷りが校正担当者の自宅に送られる。

そのゲラは、どうやって作られているのか、印刷所にもお邪魔させて頂いた。

校正刷り

新宿区・神楽坂にある
「博英プリンティング」本社。
大量の紙を扱うので、運搬用のフォークリフトが停まっている。

取材に応じてくれたのは「博英プリンティング」三代目社長の加藤英昭さん。「未来」の印刷はもともと別の会社が行っていたそうだが、「活版印刷」から「オフセット印刷」に移行する時に、その会社が廃業。当時、印刷を手伝っていた「博英プリンティング」さんが引き継いだそうだ。月刊誌や各種会報を手がけている博英さんでは、以前は短歌や俳句の結社誌・同人誌もいくつか印刷していたそうだが、ここ十年くらいで無くなり、現在、詩歌関係の印刷は「未来」だけ行っている。

割付が終わった「未来」の原稿が到着すると、まずは原稿が前後しないよう全てのページに通し番号を振る。そののち、パソコンでの作業ができるようにするため、全ての原稿データを打ち込んでいく。データの入力は荒井さんと（社長とは別の）加藤さんの二人が担当。荒井さんは、データの入力と並行して、レイアウト用紙通りにページをレイアウトする「組版（くみはん）」と呼ばれる作業も行っている。短歌誌の組版を行なう際に苦労することを尋ねると「普段使わない文字を使うことが多いのが難しい」「パソコンの中にない文字は『作字（さくじ）』と言って、文字のパーツを組み合わせて作ります」との答え。

「作字」
「魚」の下を「大」にするなど、珍しい文字を作る時には、他の漢字から「大」を持って来て作る。

「作字」を担当する荒井さんはハングルやアラビア文字など、ご自身が読めない文字を作るのが本当に難しいと言う。

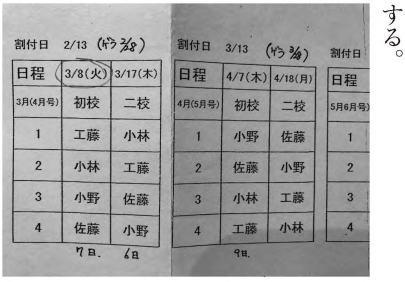
こうして、約二週間かけて入力と組版を終え、出来上がった「ゲラ」は、原稿とともに校正担当者のもとへ送られる。

校　正

現在、「未来」の校正は、小林成子さん、工藤京子さん、佐藤薫さん、小野美紀さんの四人が担当されている。

校正は二百ページ程ある「未来」を前半と後半に分けて、前半を二人、後半を二人で分担。さらに、前半を担当する二人で分

けて、およそ五十ページずつを自宅で校正する。



割付日 2/13（ﾔﾏﾀﾞ）

日程	3/8(火)	3/17(木)
3月(4月号)	初校	二校
1	工藤	小林
2	小林	工藤
3	小野	佐藤
4	佐藤	小野

7日. 6日

割付日 3/13（ﾔﾏﾀﾞ）

日程	4/7(木)	4/18(月)
4月(5月号)	初校	二校
1	小野	佐藤
2	佐藤	小野
3	小林	工藤
4	工藤	小林

9日.

割付日

日程
5月6月号)
1
2
3
4

「校正担当表」
校正は１度目と２度目で担当を入れ替えて行なっている。
そして月に２回、全員で集まる。

一度目の校正となる「初校」は三回、二度目の「二校」でも二回は読み通す。一回通読するのには十時間くらいかかるという。

主にチェックするのは「正しい漢字が使われているか（『温かい』と『暖かい』等）」「旧かな・新かなの仮名遣い」「送り仮名」。

例えば、「懐かし（なつかし）」と「懐し（ゆかし）」だと意味が違ってくるが、作者は「なつかし」のつもりで「懐し」と書いたのかもしれない。音数や歌意、時には過去の作品で作者はどちらの読み方で使っているかをチェックして「なつかし」と取れるようであれば「懐かし」と送り仮名に「か」を足す。どうしても判断がつかない場合は、作者に電話をして確認するという。そのため、歌稿を送ったあとも写しを手元に残しておいて欲しいそうだ。

また、「固有名詞」には特に気を遣う。地名では「江の島」、交通機関などでは「片瀬江ノ島」「江ノ島電鉄」、また旧跡では「江島神社」といったように同じ呼称でも書き方が変わる場合があり、その都度、公式サイトで確認をする。最近では『鬼滅の刃』のキャラクター名に苦労したそうだ。

電子辞書や複数の辞書にあたって、どれかに載っていればＯＫとしているが、難しいのは外国語。英語まではなんとかチェックするが、それ以外の言語になると確認は難しいので、くれぐれも間違わないように注意して欲しいという。

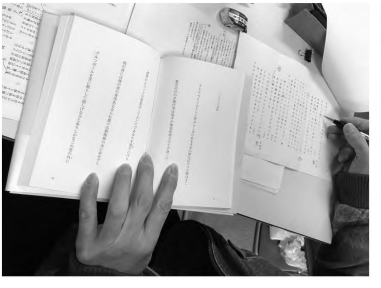
各自が自宅で校正を行ったあと、四人で集まって、一人では判断がつかない点を確認していく。厳重なチェック体制だ。

たしかに、歌を読んでいて「あれ？　この言葉の使い方ってあっているんだっけ？」とちょっとでも気になってしまうと、そちらに気を取られて歌が上手く入って来ないこともある。思うに「校正」とは、読む時の意識に夾雑物が混ざらないようにすることなのかもしれない。

校正チームをまとめる小林さんにお話を伺うと「歌を勝手に直すことはなくて、選者が直していた場合は、そちらを優先しています」「歌稿を送る際には、ぜひ裏表紙にある『送稿のきまり』で確認をしてください」とのこと。

また、校正を手伝ってくれる会員も募集しているそうで、どんな人が校正に向いているのかを尋ねると「まずは、文字・言葉に興味がある人。そして、好奇心が強くて色んなことを知っている人」との返答が。

取材に伺った短時間でも、「可惜」は「あたら」と読む。マリー・アントワネットの場合は「絞首台」ではなくて「断頭台」。年齢の「八十」は、古くは清音で「やそち」と読んでいた。と、文字や言葉の知識、雑学を総動員したやりとりが行われていた。



「実際の校正の模様」
書評や時評などでは、原典にあたって引用歌も確認する。
かなり集中力を要する作業だ。

校正が終わって、赤字で訂正が入った原稿は、再び博英プリンティングさんに送られる。そして、訂正箇所が修正された新たな「ゲラ」を作成してもらい、もう一度「校正（二校）」を行って「校了」となり、いよいよ印刷に入る。

印刷

原稿データが揃うと、丸一日をかけて「製版（せいはん）」または「刷版（さっぱん）」と呼ばれる印刷用の「版」を作る工程を挟み、出来上がった「版」を使っていざ印刷が始まる。今回、まさに「未来」四月号を印刷中の印刷所を訪ねた。

印刷は志村さんという方が担当。印刷機を八時間フル稼働させて二日かかる。

こちらが印刷機と印刷を待つ紙の束。本文用紙は「淡クリームキンマリ」という文字が読みやすい用紙を使用。１つの束で1130枚。重さ5kg前後。

用紙のサイズは「Ａ全」。Ａ５サイズの「未来」が片面に16ページ印刷でき、裏面も併せて32ページ分を1枚に印刷。これを裁断して製本する。

「山笑う」を発見！
表紙には「ビズムマット」という光沢を抑えた紙を使用。強靭で滑らかなので、持ち運んで読み込むのにも適している。

印刷が完了すると、近くにある「壺屋製本」さんに運び、三日間かけて「製本」。製本が終わると「発送所」で袋詰めや宛名印刷の作業を行う。こちらも三日間かかる。そして、郵便局から郵送。現在、土日祝日の配達が休止されているのも悩ましい。また、二月やゴールデンウィーク、年末などはスケジュールを切り詰めて対応している。

様々な人の手を経て、ついに、私たちの手元に「未来」がやってくる。

取材を終えて

取材させて頂く中で、多くの方が「今時、手作業なんですよ」「いまだに、このやり方でやってるんです」とおっしゃっていたことが印象に残っている。

もはや神話のような光景となっている、近藤芳美さんの豊島園（あるいはその前）の自宅で岡井隆さんや稲葉健二さん、吉田漱さん達がやられていたこととほとんど変わらない手作業が今も引き継がれていると思うと感慨深い。もちろん、受け継がれて来たやり方を大切に守るのがいつも最善とは限らないし、徐々に新しい方法に変わっていくだろう。令和初期までは、こんな風に作っていたのだと参考になれば幸いである。

最近は、慣れてしまって当たり前と思っていたことが当たり前ではなかったと気づくことが多かったが、「未来」の発行もその中の一つであった。

また、発行所を訪れる前は、商業誌の編集部のように編集長が君臨してあれこれ差配している場面を想像していたが、違った。

割付などに参加されている方は、私たちと立場の変わらない会員で、編集部と言うよりまさに発行所。「組織の心臓部」という言い方があるが、会員の原稿を集約して循環させる発行所は、まさに心臓のような役割を果たしていた。できるだけ血を滞らせないようにするためには、濃く読みやすい字で締め切りを守ることが一人一人にできることかもしれない。

割付、校正の手伝いはいつでも募集しているそうなので、興味を持たれた方はぜひ一度体験されてみるのをおすすめする。

発行所には過去の「未来」が揃っていて、取材中は選者の皆さんの初期の歌を探して読んだり、過去の特集を読んだりすることを陰気な愉しみとさせてもらった。最初は薄かった「未来」誌が徐々に厚みを増していく様は、積み重なる時間を思わせてくれた。

取材に際しては、どなたも作業中にも関わらず貴重な時間を割いてくれて、丁寧に分かりやすくお話しして頂き、スムーズに取材ができたことを、ここでお礼申し上げます。

最後になりましたが、皆様、本当にお疲れ様です。